

その技術を認められ、数々のアーティストの楽曲のプロモーションビデオやライブツアーへの出演もしてきた小島さん。2013年にはEXILEのライブツアーとおかあさんといっしょのコンサートツアーを掛け持ちするなど、パフォーマーとしても活躍しました。

「二日だけステージの日程が重なる日があつて、その日だけは代役をお願いしました。おかあさんといっしょのステージでは、ハチの衣装を着て舞台上をインラインスケートで滑りました。当時は自分の子ども達も小さかったので、家族の良い思い出になりました」

インラインスケートの競技者としてだけでなく、パフォーマーとしての貴重な経験が交友関係を広げ、その後の物作りへの大きな刺激となつていったようです。



ゲストパフォーマーとしてアーティストの全国ライブツアーに同行

小島工業の主要な業務である溶接。小島さんが溶接を始めたのは24歳の時だそうです。

「一番最初は、スケートの手すりを作りたいという所から始まったんです。働いていた会社が、休憩時間や業務時間が終わってからであれば作っても構わないと言ってくれて。それでちょっと作らせてもらったりしました」

空いた時間を使って、作りたいと思う物を形にしていた小島さん。物作りに懸ける思いや技術はこうして培われていきました。

そんな中、海外への遠征やアーティストツアーへの出演など、インラインスケートで活躍すればするほど、長期の休暇が必要になり、会社員を続ける事が難しくなっていたといいます。

「スケート一本でいこうかと考えた事



練習用の手すりを製作した時の様子。小島さんの物作りの原点となった

もあつたんですけど、結局それだけではまだ日本では食べられなくて。独立しようと決めました」

独立してすぐの頃は一人で現場に入つて溶接業務を行っていたそう。そこから徐々に人が増えていき、今の会社を立ち上げました。

現在、溶接金属加工業務をメインに手掛けていますが、業務内容の中にはインラインスケートなどのスポーツ競技場の設計や製作なども含まれています。物作りの原点は自分の練習用レールでしたが、今では実際に大会で使用されるセクションを製作するまでになりました。

「共に成長し、より良い物づくりを」会社の目指す方針が形となって表れています。

10月に開催された大会でも、出場選手のレベルに合わせて競技会場に必要な物を準備したそうです。

「工場の中を全部片付けて、自社のトラックも競技設備の一部として使いました。パイプを滑ったりジャンプしたりするためのグラインドと呼ばれるものも、今大会のために作りました」

大会中のフードの準備や、宿泊場所の提供など、主催者と協力して大会運営を行ったといいます。

「自分で工場を持ったら大会をやってみたいというのはあったので。その目標が一個達成できました」

さらりとそう話す小島さんからは、もっと先の大きな目標を見据えている様子が伝わってきます。

「小さい子から大人までやるっていうのもそうなんですけど、体幹を鍛えられて、体型維持にもつながるので、そういうところが魅力なんじゃないかなって思います。マラソンと水泳の間ぐらいの運動量になるので、フィットネスのような感じで始める人も多いみたいです」

東京オリンピックでスケートボードやスポーツクライミングなどのアーバンスポーツが大きなブームを巻き起こした事もあり、インラインスケートがいずれオリンピック競技となる事も期待している

小島さんに、これからの展望を伺いました。

「今の工場をスケートパークにして、選手の育成ができたかと考えています。

この先、インラインスケートがオリンピック競技になるのであれば、うちの工場の中で合宿みたいな感じでできるような。そういうものを作っていたら、若いアスリートの子たちが来るようになって、利根町に若い風が吹き込むんじゃないかって思っています」

過疎の町とアーバンスポーツという、一見ミスマッチにも見える組み合わせも、それが売りになるとおもしろいと話す小島さん。

インラインスケートを30年間続け、プロスケーターとして、競技者、パフォーマー、審査員、そしてもの作りのプロである小島さんだからこその作ることのできるスケートパーク。それが形となって、若い人たちがそこに集う光景が見られる日も近そうです。



ベテラン社員から若手社員の技術の伝承も会社のテーマ



10月に開催された大会では、海外の大会でも成績を残す選手も出場した。出場選手のレベルに合わせて、レールや台などの高さや角度を考慮し製作したそう。自身も長年プロインラインスケーターとして大会に多く出場してき経験があるからこそ、設計から製作まで行うことができる